神成

発行：救いの光教団
編集：神成編集室
東京都世田谷区北沢
（〒155-0031）　2-22-10
電話　代表03(3413)0123
http://sukui.jp
毎月１回１日発行
購読料　１部80円
（会員の購読料は会費に含む）

2025
No.635
７月号

◎教団方針

信徒よ速やかに目覚めよ、
それは光を受け、邪を捨て、光を授け、
正に生きる事である

◎方針のみちしるべ

（一）みつめなおそう明主様の心
（二）つらぬきとおそう明主様の心
（三）教団綱領を尊び実践する
（四）信仰継承は家族と家庭円満から

―明主様―

世を救ふ神の器に選まれし
我身の運命つくづく思ふも
主の神は吾に力と智慧給ひ
生きとし生けるものみな救はる
大いなる望みに生くる吾にして
小さき事にも心配るなり

御光筆『是真也吾天業』（教団所蔵）

引首印　明光
落款　自観
落款印　東山荘主

神言霊

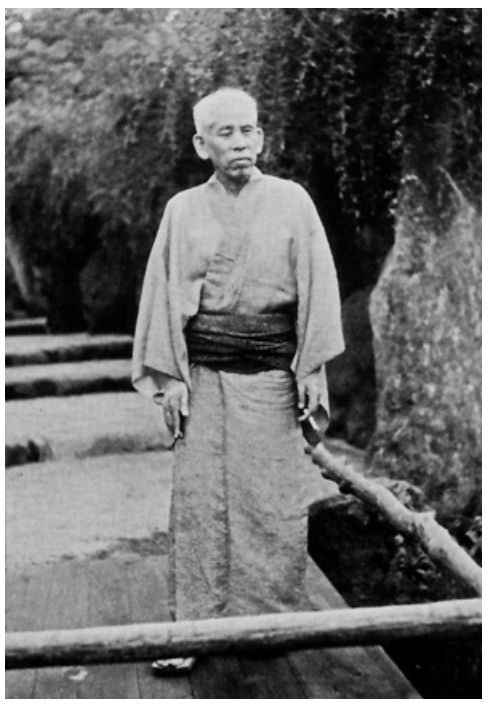
「宿命と運命」

〈お伺い〉

人間の宿命は上中下のうちの一段で、その上にも下にもございますが、地獄的苦しみから天国行けないということでございますが、地獄的苦しみから天国的状態に変わることがありますが、そこに矛盾を感じます。

【神言霊】

それは違います。宿命といっても、地獄の宿命、天国の宿命というのはないのです。いまの宿命、運命というのは階級です。天国、地獄ということとは関係はありません。たとえてみれば、人の上に立つ人間、親分とか首脳者になる者はもう決まっているのです。それで親分になる人は、必ず良くなります。それからどんなに偉い人でも、親分になれない人は、番頭とか支配人になります。そういうように決まっているのです。またそれでなければその人としての本で、これが宿命です。植物でいえば蔓性植物と言って当の発揮ができないのです。植物でいえば蔓性植物と言ってからむのがありますが、人間でも同じで、竹なら竹がなければ、それに巻き付けないから生存ができないのです。それと同じで、誰かに頼らなければ生きて行けないのがあります。それからまた、痩せても枯れても親分にならなければならない人があります。からませるほうですが、それはその人の宿命です。ですからそういう宿命がない人が無理に親分になろうとすると失敗するのです。私は昔からどこに行っても、乾分はできるのですが、決して私を引き立てるとか、私が助けられるという場合はないのです。私には助けられるという性能はないと思って諦めていました。なにかにすがることはできないのです。ですから最初は親しくしていても、後になると先方で相談に来るようになるのです。私は信仰に入る前から、誰かに相談するということは出来なかったのです。それは私が大木のような宿命だからなのです。それは生まれながらにしてそういうようにできているのです。労働者などでたまたま出世しても、宿命が相応しないのは、やっぱり落ちてしまいます。それからまた少し出世した人が労働者とかを見て、なぜ一生懸命にやって出世しないのだろうと思う事がありますが、それはそうではないので、その人はそれで満足しているので、それが宿命です。ただその宿命の中で上になったり下になったりするのは自由で、それが運命です。ですから運命は自分で変えることはできますが、宿命を破ることはできません。宿命というのは限定したものです。しかし、運命というのは宿命の最高にまではなれるのです。ですから人に使われる者としての最高になるのは、店の番頭とか支配人とかですが、それは親分に使われる者の中では最高のものです。その最高のところまでは行けるのが運命です。ですから運命は変えられるが、宿命は変えられないのです。



明主様
昭和二十八年（一九五三年）箱根神仙郷にて

教団綱領の学び

正神を敬い　祖先を尊び　恵みの光に浴くして　感謝報恩の生活を送ります（全五回）

【第五回】感謝報恩の生活を送ります

九、感謝報恩の生活を送ります

㈠　感謝が感謝を生む

『感謝』『報恩』の心を育ててまいりましょう。最初は、たとえ小さなことでありましても感謝の気持ちを抱きますと、次から次へと感謝せずにはおられないように、心が開けてくるものです。

大光明・明主様への感謝、天地自然の恵みへの感謝、周囲の人々への感謝等々…

こういう心で生活してまいりますと、人を大切にし、人の心、物を大切にし、物の心のわかる自分へと向上させて頂けるのです。

『感謝が感謝を生む』の感謝の心こそ信仰生活の真髄です。いつも感謝を忘れないところに、その人の向上の道はひらかれてまいります。

「感謝　⬇　神業奉仕の御用　＝　感謝の循環」

どんな時でも奇蹟・御守護を頂けますよう、常々の感謝・報恩を忘れないようにしたいものです。

㈡　感謝報恩をいつまでも忘れてはいけない

『普通信仰者の最初のうちは、至極真面目に御神徳や奇蹟に感激し、熱心な信仰を続けつつあるのであるが、正しい信仰である以上、お蔭は著しく、自然に多数の人から尊敬される事になり、生活環境も大いに恵まれるので、本来ならばいよいよ神恩に感謝し、一層身を慎しみ報恩に尽くすべきにもかかわらず、凡人の悲しさ、不知不識恩になれ、慢心が生じ、心に隙が出来るのである。』

㈢　感謝は神に通ずる

『本教は大光明世界（地上天国）を造るのであるから、なによりもまず、自分の一家が天国にならなければならない。それにはまず自分自身の心が天国になることで、心の天国とは心に苦悩のない状態である。というわけで焦るのも苦悩なら、思うようにならないと煩悶する悩みも地獄であるから、少なくとも苦悩から脱却することである。それには感謝によって苦悩を打ち消すのが一番いい方法で、つまり心の中に地獄を作らないことである』

㈣　御奉仕は、誠心からさせて頂く事が大切

『物質を提供しようとする事は、すでに精神が出来ているわけですから、それで結構です。しかし、義理や情けに流されて、あげたくないのに強制的にあげるのは、浄財になりません。それでは、お金に汚れがあり、光がなく、永遠の生命がない事になって、神様は決して喜んで受け取れません。』

㈤　神様にだけ見て頂く

『よく他の信仰なんか、お金などを寄付すると「何千何百円」とか、「何の某」と、札を出しますがね。私の方は、そんな事は全然――誰がいくら出したかわからない。いくら出したと言って、偉く思わせようというのは通用しない。

神様に見てもらおうという事はあるが、人間を対象とはしないです。神様に見て頂く、それを対象にしますから、それが本当というわけになる。だから、考え方が、神様中心――神様だけに見て頂く、お気にいって頂く、これでよいのです。そういうふうに思っていると、きっと御守護が厚いのです。』

㈥　祖霊様への感謝報恩

『死後の霊魂に対し、その遺族が誠意をもって懇ろなる法要を営むとか、または遺族およびその子孫が人を助け慈悲を行い、国家社会のために尽くす等、善徳を積むことによって、祖霊の浄化作用は促進されるのである。

右の理によって、親に孝を尽くすのは現世のみではなく、むしろ死後、供養や積徳によって霊界における親に孝養を尽くす方が、より大きな孝行となるのである。』

『人間が心から祭典を仕えると霊は非常に喜ばれるが、形式だけのものはあまり喜ばれない。その場合仏教では戒名、神道においては、御鏡、石、文字、神籬等に憑依する。

故に祭典の場合は身分に応じ、できるだけ誠を込め、立派に執行すべきである。』

『いかなる人間といえども正守護神、または守護霊なるものが霊界に在って付随し、常に守護していることである。これは祖先の霊であって、人が生まれるや、それを守護すべく祖霊中の誰かが選抜されるのである。』

『正守護神は大抵一人ですが、一人では間に合わない時がある。そういう時は他の祖霊に手伝ってもらう。それからぐく危急の場合には、正守護神が神様にお願いする訳です。そこで神様が力を貸して下さるのです。

危急の場合なんですが、それが奇蹟というのです。奇蹟は正守護神がつくるのですね。大きい奇蹟は神様から力を借りるのです。』

『正守護霊とは祖霊中から選抜されたものであって、不断にその人の身辺に付き添い、守護の役目をしている。例えば災害、危難、病気、悪行、怠慢、堕落等々、すべてその人を不幸に導く原因を防止する。よく虫が知らせる、夢知らせ、邪魔が入る、食い違い、間が悪いなどというのがそれである。またなにかの事情で、汽車に乗り遅れたため、危難を免れることなどもそれであり、悪に接近しようとすると故障が起き、不可能になったりするのもそれである。』

五月慰霊祭会長挨拶【要旨】

本日は五月慰霊祭を皆様と共に執り行う事が出来ました事感謝申し上げます。

私たち人間には三つの魂が宿っていると明主様の教えにあります。

一つは神の分霊で本守護神といい、良心、善の魂であり、この魂は神様との取り次ぎ者になります。

二つ目は副守護神で、動物の霊です。狐、狸、犬、猫、または天狗や龍神などです。前頭部に熱があり浄化していると理性が十分に働かなくなり、副霊の活動が活発になり煩悩といわれる人間の欲を満たすような行動や感情的な行動を起こしがちになり、時には罪を犯すことさえもあります。

三つ目は正守護神で、皆さんの御先祖様から選ばれて、常に身の回りに付き添い、守る役目をしています。

去る、五月十日、五月慰霊祭が本部祖霊殿にて執り行われた

この事について、明主様へのお伺いの中に

「霊界に行くと正副守護神はやがて離れるとのお言葉でございますが、そういたしますと、「霊界で楽しんでいる」とか「再生する」とか言う場合の霊とは本守護神そのものを指すのでしょうか。あるいは本守護神が守護する霊体なるものが別にあるのでしょうか。」

というお伺いに対して、明主様は、

『「霊界で楽しんでいる」っていう場合は本守護神ですがね。一度人間に生まれたものは副守護神や正守護神の感情が残っているんです。だから、ぜんぜん本守護神ばかりとも言えないわけです。いま話しているのは天国の場合ですが、本守護神はいいことをするのが楽しいんで、人間界に対していろいろいいことを働くんです。いわば神様になって天国に行くわけで、神様であり、あるいは本当の仏様だと言えるんです。地獄にいる場合は、副守護神が離れないでくっついているんです。副守護神は地獄を好むんですが、しかし副守護神でも改心すれば天国にも行けるんです。狐でも龍神でも天国に行くのがあるんですよ。正守護神は、その人が天国に行く場合でも、地獄に行く場合でも、人間が死ねばだいたい離れます。そして人間界で人間を守護した功によって霊界で一段も二段も格が上がるわけです。しかし、正守護神の中でも働きがあるのと、ごく怠けてるのとありますからね、いろいろですよ。』

と仰っておられます。

この事が我が子を思う愛よりも億兆倍も尊いものであるという事ではないでしょうか。

明日は母の日です。また、誕生日というのは生んでくれたお母さんに感謝する日でもあります。ご健在の方、霊界におられる方もいらっしゃることと思います。両親の存在があってこそ自分がいるという事を思いつつ感謝の気持ちをお伝えされてみてはいかがでしょうか。

最後になりますが、今の教団にとりましては光守様が母親のような存在ではないかと思います。光守様に感謝と思いを寄せつつ、皆様とともに五月慰霊祭をご参拝させて頂きましたこと大光明・明主様、幽世大神様に感謝を申し上げ、ご挨拶とさせていただきます。

献饌の在り方について

この度、令和七年の天啓祭より献饌の在り方を改めさせて頂く事となりました。

令和に入り、光守様の御心により平成までの従来の献饌の在り方が改められました。これは、旧態依然とした神様へのお供え物の考え方を改めさせて頂くという光守様の御心がございました。

明主様はこの事につきまして、『いまに新しくお祀りの形式を作るつもりですが…』と仰っておられました。しかしその後、御浄化にはいられ御昇天あそばされまして、私達にお示しされることなく現在まで続いてまいりました。裏を返せば、決まり事が無いという事から『あとは皆で考えよ』という明主様の御心とも解釈できるかもしれません。そのような事から令和の新しき時代をむかえ光守様は救いの光教団としての献饌の在り方をお示しされたと拝察致します。令和二年十月号の神成四面にて、ご理解いただければ幸いです。

それは、救いの光教団の前身でもある大日本観音教大成会時代、明主様との御面会日の記録を綴った「御光話録」というものがあります。

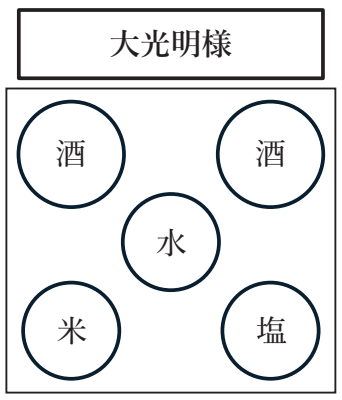
その中で、昭和二十三年六月二十八日の御面会日において明主様は、『お供えものは人間のほうへ向け人間が見やすいようにするのが本当です。神と人間と両方満足するように。気持ちをやはり神様に上げることです。お供えものを神様は召し上がるというより霊を入れてくださる。』

は、「神饌物について」、「新しい献饌の在り方」に関する光守様の御心と解説が掲載されております。その中で「これからは、全て神様に向けてお捧げするようにしてください」、「私はどちらかというと、素朴でシンプルな美しさを求めています」と御心をお示しされております。

今回、改めさせて頂く点は、この御心をさらに奥深いものにさせていただくものであるという事と、仰っておられます。この明主様の神言霊を頂き、光守様の御心と重ね合わせ、神饌物は私達から見て美しく、すがすがしく、シンプルな盛り方をさせて頂く事とし、さらに神様は霊を入れて下さる。つまり光を入れて下さる、光を授けて下さるわけですから、お供えする際には神様への感謝の気持ちをお捧げするという点で改めさせて頂きたいと存じます。

詳細につきましては、各布教拠点に「改定献饌配置表」をお配りしておりますので、布教拠点の責任者の先生または準ずる方から説明を受けながらご準備いただければ幸いです。また、ご家庭におかれましてはこの度の『神言霊』に基づき神饌物をお供えしていただければ幸いです。よろしくお願い申し上げます。

※神酒饌の向きが変わります。



トピックス

明主様の御遺作、滋賀教会へ

五月から六月の二ヶ月間にわたり明主様の御遺作展示が滋賀教会にて行われた。予め本部に申込みを行い、五点の御遺作をお借りしての展示となり、『観音光』、『光明浄地』をはじめ、観音様の御姿の御軸の展示が行われた。礼拝堂は御遺作が展示されると、なお一層の神光に満ちた空間となり、参拝に訪れた信徒も実物を間近に拝しいつもと違う教会の雰囲気を満喫していた。

御遺作展示が行われた滋賀教会礼拝堂の様子

塩釜教会光導実践会報告

東日本大震災被災地の霊界お浄め

去る、令和七年五月二十八日、塩釜教会では東日本大震災被災地の霊界お浄めが行われました。今回は女川、出島（いずしま）が対象となりました。女川は東日本大震災で三十メートルを超える津波が押し寄せ、高台にある五階建ての女川病院の四階まで津波が押し寄せ、女川の近くにある出島でも多くの方が犠牲になられました。

当日は、女川のスーパーにある慰霊碑に参拝をさせて頂き、出島に渡る橋の手前にある駐車場から出島に向かってお浄めが行われました。

塩釜教会から現地までは車で一時間半ほどかかる場所ではあったものの、信徒の皆さんは喜んで参加され、平日にもかかわらず十五名の参加を許され、快晴に恵まれ、晴れ渡る青空のように御霊様の喜びが参加者にも伝わったような一日でした。

塩釜教会では、光導実践会を五月と十月に行っており、五月も定例化しています。今回は、お浄め終了後、女川駅から目の前にある道の駅「おながわ」で昼食をとり、たのしくお浄めができました。大光明・明主様に感謝いたします。ありがとうございました。

快晴のもと霊界お浄めが行われました

岡田茂吉師の自然農法

田植え作業終わる

四月末より稲苗作りが始まり、五月初旬は気温の移り変わりが激しく、育苗用のビニールハウスの温度管理に細心の注意を払いながら育苗を続けた結果、草丈に多少のムラはあるものの立派な苗が育った。育苗と同時並行で水田の準備も進めてゆき、トラクターで水の張られた水田をかき混ぜながら平（たいら）に均（なら）してゆく「代掻（しろか）き」作業を二回行い、田植えの準備を整えた。

五月二十一日、いよいよ田植え作業をむかえ、例年通り専用の「田植え機」を使用し少数精鋭で作業が行われた。この日は好天に恵まれ、夏場のような暑さとなり大分体力を奪われるような状況ではあったものの、作業のトラブルなども無く、伊那教会信徒の作業奉仕もあり、一日間で必要な後片付けも含めて全ての作業が無事に終了した。

田植え以降は除草が重要な作業となり、六月の始めから期間を置いて数度にわたり除草作業を行っていく。毎年、異常気象といわれる昨今ではあるが、そのような天候にも負けず元気に生長して頂けることを祈るばかりである。

積み上げられた田植え前の稲苗

田植え作業を終えた水田

田植え作業の様子

教団創立五十三周年記念祭・八月祈願祭のご案内

◎祭典日　令和七年八月一日（金）
　十時　開式
◎参拝所　東京本部、各布教拠点
　（本部より一斉中継）

VEGETABLE OIL INK　植物油インキを使用しています。